

「教育臨床総合研究16 2017研究」

「初等音楽科内容構成研究」におけるピアノの指導に関する一考察

— 初学者の学び合いに着目した授業実践を通して —

A Study on instruction for piano in “Study on Teaching Contents of Music Education”
:Focusing on a mutual learning with piano beginners

古川 浩美

Hiromi FURUKAWA

(島根大学教育学部芸術表現教育講座特任准教授)

要 旨

島根大学教育学部の「初等音楽科内容構成研究」は、小学校音楽科の授業に対応できる音楽の基礎的な知識・技能および表現能力の習得をねらいとしている。授業では、ピアノ、声楽の個別指導および一斉指導に加えて、ペアやグループ活動における学生同士の学び合いが大きく関与している。本稿では、平成28年度後期の授業実践をもとに、ピアノの初学者に対する指導のあり方と学生同士の学び合いについて考察し、さらなる効果的な指導法の可能性を探った。

〔キーワード〕 初等音楽科内容構成研究、ピアノ指導、初学者、学び合い

I 研究の背景

本稿は、島根大学教育学部の専門教育科目「初等音楽科内容構成研究」について、ピアノの初学者への指導のあり方を、多様な学び合いという観点から考察するものである。

「初等音楽科内容構成研究」は、島根大学教育学部が教員養成学部にて特化した2004年に開設された授業である。教科教育系科目と教科専門系科目をつなぐものとして、専門教育科目の中に位置付けられた一連の初等教科内容構成研究の一科目である。この科目が全国的にあらためて注目されたのは、2012年のことであった。

2012年5月に中教審の「教員の資質能力向上特別部会」より、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（審議のまとめ）が公表された。ここでは、

教科に関する科目については、学校教育の教科内容を踏まえて、授業内容を構成することが重要である。そこで、例えば、「教科に関する科目」担当教員と「教職に関する科目」担当教員とが共同で授業を行うなど、教科と教職の架橋を推進するなどの取組が求められる。併せて、教科教育学の更なる改善も必要である。特に、教員養成系以外の課程における教科に関する科目については、全学的組織である教員養成カリキュラム委員会等の組織を活用し、担当教員に対し、教職課程の科目であることを意識して展開することを徹底することが必要である（中央教育審議会 教員の資質能力向上特別部会2012：12）。

と示され、教員養成カリキュラムの改善が求められた。

同月開催された日本教育大学協会全国大学部門音楽部会の第37回全国大会（於：群馬大学）では、第一分科会「音楽（科）教育担当教員のアイデンティティと使命」において、教科と教職の架橋についての議論が交わされた。提言者のひとりであった東京学芸大学の加藤富美子は「鳥根大学教育学部の『音楽科内容構成研究』に注目したい。この科目は『専門諸科学を学校教育において再構成し教授する』ために開設されているが、その中の一つ『初等音楽科内容構成研究』（1年次対象）は、異なった分野の教員4名の共同体制で開講されている。鳥根大学の教員養成では、学校現場や教育委員会と連携した様々な試みが行われ、成果を上げているので、これからますますこの『音楽科内容構成研究』に期待する」と述べている（日本教育大学協会全国音楽部門大学部会2012：15）。

「初等音楽科内容構成研究」の授業は、ピアノを特任教員である筆者と嘱託講師1名との2名で、声楽を嘱託講師1名、全体の取りまとめ役として専任教員1名の計4名で担当している。

先行研究としては、2012年には『鳥根大学教育学部紀要』第45巻別冊に、「教員養成学部における教科内容研究—『教科内容構成研究』授業の実態と課題—」というテーマで特集されている。その中には、この授業の取りまとめ役である佐々木直樹による「『初等音楽科内容構成研究』授業実践報告—演奏表現の理解と技術習得—」も含まれている。佐々木の研究報告では、授業内容について主に声楽の立場からの詳細な分析と考察を行い、この授業が単に教材の演奏方法や演奏技術の習得にとどまらず、音楽の授業のなかで児童に感動的な体験を与えることのできる教員の養成を目指していることを論じている。

本稿では「初等音楽科内容構成研究」の授業を、筆者が担当するピアノの指導に焦点を絞り、ピアノ初学者の学生同士の学び合いという点から考察する。具体的な事例として、平成28年度後期の授業実践の記録を振り返る。本研究を通して、これまでの授業実践を整理し、今後の授業改善への手がかりとしたい。

Ⅱ 初等音楽科内容構成研究の概要

1. 授業の基本的な枠組み

初等音楽科内容構成研究の授業は、前期は人間生活環境教育専攻をはじめとする初等教育開発専攻以外の学生を対象とし、後期は初等教育開発専攻を対象に開講している。この授業は、免許法の「教科に関する科目・音楽（初等・幼児）」に該当し、小学校音楽科の教育現場に対応できる音楽の基礎的な知識および表現能力の習得をねらいとしている。具体的には、履修学生個々の能力に応じた個別指導と一斉指導によるピアノ独奏曲および独唱曲の演習や、小学校の歌唱共通教材の歌唱および伴奏の演習を通して読譜力、歌唱力、ピアノ演奏力を養い、音楽の基礎的な演奏技術の習得を目標にしている。さらに合唱などグループ学習を積極的に導入することにより相互指導、創造力、合唱・合奏の楽しさを学び、それらの体験を通して協調性、自主性を養い、小学校教員としての多様な音楽表現力を身につけることを目的としている。達成目標は、以下の4点である。

- a おもな歌唱共通教材について弾き歌いができる。
- b ピアノに関する基礎的な知識・技術を身に付け、バイエル70番以降の曲を弾くことがで

きる。

- c 範唱するために必要な声楽の知識・技術を身につけている。
- d グループ活動として少人数の合唱に取り組み、期末に発表することができる。

実技発表は、ピアノ独奏・独唱・弾き歌い・合唱の4種類をおこない、出席状況と授業への積極性、グループ学習と発表への取り組みの3つの観点から総合的に評価している。

授業は、特任教員である筆者と嘱託講師1名の2名でピアノ独奏及び弾き歌いを、嘱託講師1名が独唱を、合唱は3名が共同で担当している。

ピアノ実技、歌唱、および弾き歌いは、小学校教員を目指すものにとって必ず身につけなければならない技能のうちの一つである。教育現場における音楽活動の中で、ピアノは音楽の楽しさや喜びを児童・生徒に伝え基礎的な表現能力を育てるうえで中心的な役割を担っている楽器である。荻田泉は「ピアノが有する特質として、音程の確実性、音域の広さ、ハーモニーが容易に出せること、さらに独奏楽器としては勿論、伴奏楽器としても最適であること等が挙げられる。したがって、幼児、児童への指導者を志す者は、ピアノ演奏の技能を習得するために十分な練習を積むことが要求される」（荻田2012：215）と述べている。ピアノ演奏の技能は、歌唱指導や合唱など多くの音楽活動の場面に密接に関わりその支えとなっている。2013年実施の小学校教員採用試験では、全国64都道府県市のうち45都道府県市でピアノ実技、歌唱、器楽実技、弾き歌いなどの音楽実技検査を行っており、そのうち弾き歌いを実施しているのは37都道府県市であった^{注1)}。

「初等音楽科内容構成研究」の授業を履修する学生のうち約4割はピアノ実技の初学者である。半期という短い期間で初学者がピアノ実技を身に付けて弾き歌いをするには、かなりハードルが高い。この授業では、ピアノ実技・歌唱の徹底した個人指導および集団指導をグループ活動と並行して行うなかでそれぞれの分野を関連させ、相互作用により指導効果をあげ、それを可能にしている。

この授業で使用している教材は以下のとおりである。

・ピアノ独奏教材：

『2訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』（大学音楽教育研究グループ編）、教育芸術社

『改訂 大学・教職課程のためのバイエルと教材研究 Cより始める指導の新体系』（大学音楽教育研究グループ編）、教育芸術社

『ブルクミュラー 18の練習曲』（春畑セロリ解説）、音楽之友社

・独唱教材：ペルゴレージ作曲《ニーナ》（『イタリア歌曲集1中声用』畑中良輔編、全音楽譜出版社発行）

吉丸一昌作詞、中田章作曲《早春賦》

・弾き歌い教材：文部省唱歌 高野辰之作詞、岡野貞一作曲《春がきた》

文部省唱歌 高野辰之作詞、岡野貞一作曲《春の小川》

文部省唱歌《茶つみ》

中村雨紅作詞，草川信作曲《夕やけこやけ》

・合唱教材：アンジェラ・アキ作詞作曲，鷹羽弘晃編曲《手紙》

岡田富美子作詞，東海林修作曲《怪獣のバラード》

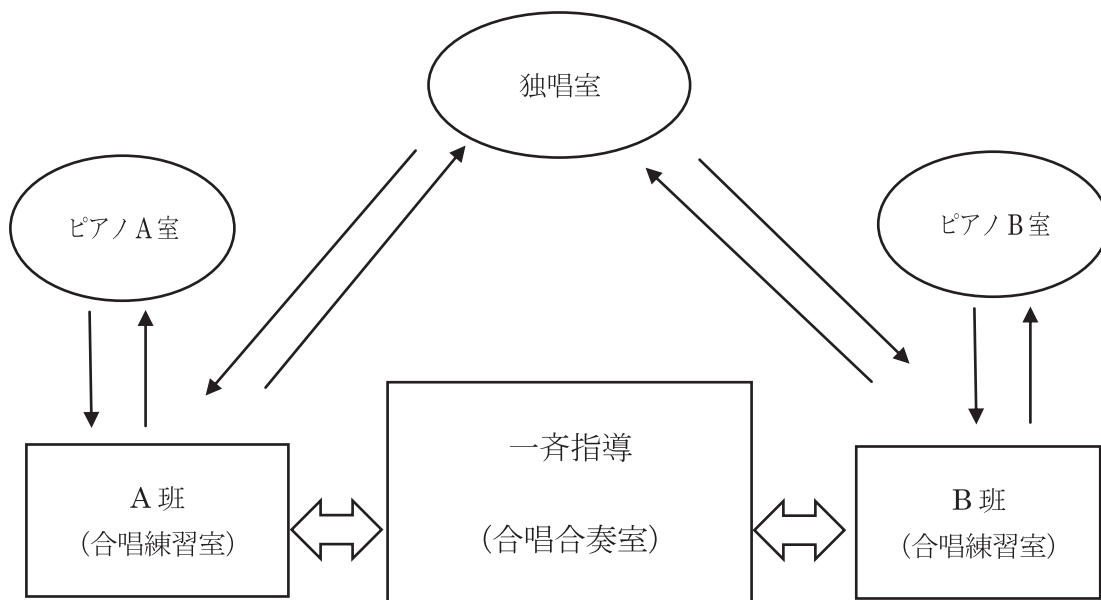
越智志帆・多保孝一・いしわたり淳治作詞，多保孝一作曲，牧戸太郎編曲《愛をこめて花束を》

2. 授業の実際

(1) 授業の流れ

初等音楽科内容構成研究の授業は，ピアノと声楽の個人実技レッスンを中心に進めていく。90分の授業の中で，歌唱・ピアノの個人練習の時間は取らず，授業時間外に各自予習・復習を行うことを前提としている。授業の中で学生は班ごとに割り当てられた教室を使用し，そこで合唱の練習に取り組む。ここをベースとして，独唱の個別指導やピアノの個別指導を受けるために各指導教員が待機するレッスン室に交替で出向くかたちをとっている。全員対象の一斉指導や実技試験には合唱合奏室（大教室）を使用し，またグループごとの歌唱一斉指導のために教員が各班の教室に出向くこともある。図1に各教室と学生の流れを示す。

【図1】



期末実技試験として，ピアノ独奏・独唱・弾き歌い・合唱の4種類を実施する。演奏は全て他の学生の前（履修学生全員の前）で行う。また試験において評価基準に達していない場合は，試験期間に随時再試験を行い4種類全てにおいて評価基準をクリアすることを必須条件としている。その他合唱については中間発表を行っている。

(2) 多様な学び合いを促すグループ学習と個別指導の実際

グループ編成においては、さまざまな音楽経験・年数や能力の学生を偏りなく分けるために、【第1回授業】のオリエンテーション時に、記名式のアンケート調査を実施している。アンケートの主な項目は、ピアノ個人レッスンの経験の有無と年数、小中高での音楽部活動の経験と楽器の種類、合唱の経験とパートなど音楽歴に関するものである。加え授業への要望や不安な点、また自己紹介等自由記述の欄も設けて構成メンバー把握の一助としている。さらに、時間外の個人指導に必要性が出た場合に対応できるようにするために、授業の前後の空き時間についても調査を行っている。

個人練習にはピアノと練習場所が必要だが、この授業を履修している期間は大学の音楽施設・設備を使用することを許可し対応している。

【第2回授業】各グループメンバーを発表、併せて合唱中間発表、期末実技試験及び再試験の日程を発表する。班ごとにそれぞれ自己紹介をし、以下の3点について話し合いを行う。

- ①リーダー・サブリーダー・伴奏者2名を話し合いにより決定する。
- ②授業時間外の練習に備えてリーダーを中心に相互に連絡し合える体制づくりをする。
- ③ピアノ個別指導を毎週必ず受けることができるよう授業時間の後のコマが空いている学生を後半にすること、また、伴奏者が揃って個別指導のためにグループ活動から抜けることがないように留意しながらピアノレッスン順を決定する。

以上3点の話し合いが終了した時点で、各班のリーダー・サブリーダー・伴奏者2名を全員に紹介し、これから半期この班単位で活動していくことを互いに確認し合い活動開始となる。

まず行うのは班単位で巡る音楽施設（教室、練習室）案内及び施設設備利用に関する利用方法や注意事項の説明である。普段音楽研究室における施設に立ち入る機会のない学生にとっては、足を踏み入れた瞬間から異空間であり、音楽研究室内の学生が練習する音や雰囲気を感じながらのこの巡回中は驚きや興味関心、期待や不安の表情をあらわにしている。この時間は、これから半期音楽を通して日々自分とグループとに向き合っていく動機づけとしても重要な役割を担うと考えている。授業の締めくくりに発声練習の一斉指導を声楽担当教員が行う。

[配付物]

- ・ピアノレッスン確認票-10回分の指導者サイン欄（実技試験までの各自受講目安）
- ・ピアノ初学者用プリント（担当者が独自に作成したもの）
- ・テキストよりピアノ経験年数別に課題を発表

課題の中から選択し、1回目のレッスンまでに「弾ける」「十分にできた」と各自思える状態にして準備する

【第3回授業】では、ピアノ初学者のための入門講習（約40分間）をピアノ教員2名が担当して初学者全員合同で行う。この時間と並行して、その他のメンバーは歌唱一斉指導を受けた後に各班の合唱自由曲選択のため話し合いを開始する。また合唱課題曲については、パートを決めて練習を開始する。ピアノ初学者のための入門講習終了後は初学者を除いてレッスン順に従ってピアノ個人指導を進める。

【第4回～第7回授業】ではグループ活動及び個別指導を行う。【第8回授業】ではグループ活動及び個別指導を引き続き行うが、個別指導の順番を一部変更してグループ内での初学者

を合同で指導し、聴き合いと意見交換の場を設ける。弾き歌いの楽譜を配付する（初学者は《春がきた》、経験者は《春の小川》、《夕やけこやけ》、《茶つみ》より1曲選択）。【第9回授業】では、グループ活動および個別指導の中でピアノ独奏の曲について選曲を開始する（第12回授業までに決定する）。

【第10回授業】で合唱中間発表を行う。ここまで合唱に関しては譜読み、音取り、表現の工夫を学生主体で行っている。ピアノ教員は伴奏者に対して指導、助言を行っているがピアノ伴奏パートのみでの指導であり、合唱と合わせた状態には全く関与しない。各班による発表の後講評を行う。ここで留意する点は、音楽専攻の学生ばかりではないこと、履修条件によっては音楽専攻の学生が全くいない場合があることも考慮して、学生主体の活動に対し取り組みの姿勢やその成果をまず十分に認めることである。その上で、言葉を吟味しながら専門的な視点から講評と助言を行う。

気づき、理解し、体感した後の学生たちの変化は、担当者の想像をはるかに超えることさえある。また、中間発表は個人や集団の考えを発展させ実現力を飛躍的に向上させる最も重要な分岐点となるため、時には学生の感想や気づき、意見などを交えながら丁寧に時間をかけて行う。伴奏者の重要性についてはここで触れ、表現の工夫においてピアノパートが合唱と密接に関わりあっていることを伝える。

【第11回授業～第13回授業】でグループ活動および個別指導を進める。弾き歌い実技指導は第11回授業より開始するが、ピアノ初学者に対しては既に弾き歌い課題配付と同時に独奏曲の指導と関連づけながら指導を開始している。

【第12回授業】においては、初学者と経験者2名一組となり弾き歌いの聴き合いと意見交換をする場を設ける。

【第14回授業】 ピアノ独奏・独唱実技試験 聴き合い、独奏について教員による講評 再試験者の告知。

【第15回授業】 独唱試験（続き）および弾き歌い試験 聴き合い、教員による独唱・弾き歌いについての講評、再試験者の告知。弾き歌い再試験者への個々に対する指導と再試に向けての合同指導（必要に応じて補講を行う）。

【第16回授業】 再試、合唱試験 再試の結果発表、合唱講評。全員で合唱課題曲《手紙～拝啓十五の君へ》演奏。

Ⅲ 平成28年度後期の授業実践から — ピアノ初学者の学び合いを中心に —

1. 本授業におけるピアノ初学者の課題と指導方針

平成28年度後期「初等音楽科内容構成研究」の授業履修者は18名で、このうち8名がピアノ初学者であった。上述の記名式のアンケートをもとに、ピアノ経験年数や音楽部活動の経験の有無などを考慮し、音楽経験に偏りがないう9名ずつ2つのグループに編成した。

筆者の担当した班には、ピアノの学習経験のない学生が4名いた。そのうち2名（A学生、B学生）は高校時代に授業で「音楽」を履修している。アンケートによると、「授業への不安な点」を尋ねる問いかけに対して初学者は、「ピアノが弾けないので授業について行けるかどうか心配」「歌も苦手」「自分だけが遅れを取りそうで不安」「練習時間の確保が大変そう」と、他の班含めて初学者8名全員がピアノに対する不安を回答している。その一方で、自由記述欄

には「この機会にぜひピアノを弾くことができるようになりたい」「小学校の教員になりたいので、気合いを入れて取り組みたい」など、前向きなコメントも多く、不安を抱えながらもこの授業に期待と覚悟をもって臨んでいる様子がうかがえた。

ピアノを弾くことには、楽譜を読むための視覚、読み取ったものを理解してイメージする力、脳と指先を繋いで鍵盤に伝える運動神経、音を聴き吟味する聴覚、鍵盤に触れる際の指先の触覚、等々様々な感覚を駆使する必要がある。単に楽譜に書かれている音を正しく並べることではない。「間違えてはいけない」という呪縛から解放された上でスムーズに弾けるようになることを目指して辛抱強く練習を重ねなければならない。そのためには、個々のあらゆる感覚を目覚めさせ解放し、それらを結び結びつけて生き生きと身体を使うことと、実現力を高める練習を自ら工夫してできるようになることが必要である。初学者にとっては半期という短い期間に、初めてのピアノに取り組み、《早春賦》とイタリア語の《ニーナ》を暗譜し、グループで合唱曲2曲に取り組み暗譜で歌えるようにし、弾き歌いに取り組み。更にそれを全て人前で発表する。これらが別々の課題として並行するため、課題としては非常に多いといえる。

しかし、実際には、短期間に集中して音楽的な刺激を受け続けることや、グループ活動を通しての学び合いにより、初学者の感覚が開かれていく。そして、それぞれの課題を結びつけながらの練習を体験することにより、練習効果があがり、総合的な力を徐々につけていくことができる。そして期末実技発表時には堂々と実技発表をし、《春がきた》を弾き歌いする学生の姿を見ることができるのである。

2. 初学者のためのピアノ入門講習

(1) オリエンテーション

初学者のためのピアノ入門講習は、ピアノ担当教員2名で初学者を対象に合同で行う。まず伝えることは以下の4点である。

- ①目的意識を持って練習を重ねれば、半期で弾き歌いが必ずできるようになるということ
- ②脳の情報処理の仕方や体の機能はそれぞれタイプが違うので、脳と指先の感覚を繋ぐつもりで焦らずにじっくりと取り組めばよいこと。
- ③まずは自分の感覚を大切にすること。「大体できる」「前よりも～」ではなく、今自分が課題に対して「できた」「できる」と思えるまで取り組む。納得しながら進むこと。
- ④「難しい」や「わからない」と思うことに関しては「何が・どのように」であるかをできるだけ具体的に考えてみる。レッスンで丁寧に対応するので心配はいらない。

課題への取り組み方としては、「与えられた課題にマルをもらうために練習し、指摘されたところを直してマルになるようにする」受け身の練習ではなく、主体的に取り組み、自分で「できるようになった」と思えるもの、あるいは「困っていること」や「うまくいかない」と感じるものを各回のレッスンまでに準備しておくようにと伝えてある。そのことを踏まえ初学者に向けてもう一度練習の取り組みに対する心構えを確認するというかたちにもなる。ピアノ実技を始めるにあたり、一人ひとり目と目を合わせながら話をするこの場面は、指導者としての姿勢を伝え、不安を和らげ学生が「必ずできる」ことを意識するために大切な場面である。

(2) 演習

その後、直ちに演習に入る。まず、最小限必要な情報として、以下の4点を解説した。

- ①中央ハの楽譜上の位置と鍵盤上の位置
- ②指番号について・指の体操
- ③4拍子, 3拍子について
- ④音符の長さについて

教材は『改訂 大学・教職課程のためのバイエルと教材研究Cより始める指導の新体系』4～5ページを使用する。ピアノ教員1名が解説しながらもう1名がピアノで範奏し、続いて全員で一斉に弾いてみる。指導者は必要が生じた場合に説明や助言をするという進め方で、片手ずつの演奏に始まり、両手が同じ進行をする5指の範囲内で弾ける6曲の課題に取り組んだ。また、学生の様子に応じて隣同士で確認したり、教え合ったりする時間を取りつつ進行した。

楽器は電子ロール鍵盤を使用する。その意図は、触れると音が出るので身体に余分な力がかからず指先に意識を集中させることができること、弱音に設定することで間違っても余り目立たないので、思い切って挑戦することができることなどの効果がある。

この時間では、声を出して拍を数えながら曲に合わせて手拍子をしたほか、胸の前で両手を組み、指定された指番号に即座に反応して指を動かす指遊び、階名で旋律を歌いながら鍵盤に触れ指でなぞるなど、声を出す、あるいは歌うことと動作の組み合わせを時間いっぱい行った。音を間違えずに正しく弾くために黙々と鍵盤に向かう姿をイメージしていた学生たちの中には、次々と繰り出される課題に対して、意外にも順調に反応できる自分の様子に力が湧き、「できそうだったら、次のテキストの中から曲を弾いてみてもいいですか」と尋ねる者もいるくらいである。漠然と難しく考えて、弾くことに対して不安を抱えている初学者に、「大丈夫」という感覚を芽生えさせるのは重要なことである。

この時間で取り上げた全7曲を次回、第1回目個人レッスンまでの課題とし、できたならテキスト『2訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』に各自取り組むように指示して入門講習を終わる。

3. 個別指導

(1) 個別指導における学び合いの姿

個別指導に入ってから、筆者が担当した初学者のA学生、B学生、C学生、D学生のうち、A学生とB学生は、レッスン順が並んでいたため、個人指導の時間の一部を重ねて互いのレッスンの様子を観察し、問題点や解決方法を共有する時間を作ることにした。以下、A学生とB学生の両者を対象に、授業実践における学びの様子を記述する。

①ピアノを弾く姿勢について

A学生は、机に向かう時のイメージでピアノに向かい、椅子に深く腰掛け鍵盤にできるだけ近づく姿勢を取った。腕、手全体を硬くして力を入れて弾いている。ピアノを弾くには、身体、特に腕が楽に使えることが必要であることを伝え、座り方と椅子の高さを調整した。手の支えをしっかりとさせて肩から腕にかけてリラックスした状態でゆっくりと指運びの練習を行うと、

ぎこちなさも消え自然な流れで弾くことができるようになった。

続いて、A学生の様子をそばで観察していたB学生が交代して、座り方・椅子の調整と、自然な手の形と指運びを演習し、A学生はそれを見ながら復習する。その後A学生とB学生は、指運びについて何度もポイントを確認し合いながら練習した。

②和音伴奏について

テキスト『2訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』は、ハ長調のI・Vによる和音伴奏から始まる。左手で奏する伴奏形をつかみやすくするために、このテキストを使用して、最初の段階から徹底して和音のポジション練習をさせている。IV・V₇を加えそれぞれのポジションを覚えていくのだが、その際に指の形と音を一致させるために「低い音から上に向かって3つの音を声に出して言いながら、何度も繰り返して手の形とともに覚えること」を課題としている。ピアノ実技において左手パートの担う役割は大きいのだが、左手を動かすのが難しいと感じる場合が一般的に多いので、左手を意識して使う場面を増やすこともねらいとしている。

A学生とB学生とで和音のポジション練習を行った。先に取り組んだB学生は、非常に指の反応が良く、難無く各ポジションを覚えることができた。A学生はB学生のポジション練習を観察しながら、動きに合わせて指を動かしていたが、実際にピアノに向かうと音をひとつずつ別々に探し和音を弾くまでに時間がかかってしまう。

A学生にはB学生の指の動きをモデルにして各ポジションを見せながら、手の形で捉えるよう助言した。さらに、IからVつまりドミソからシレソにポジション移動する際には、ドミソの位置と手の形を基準にして、ソを弾いている1指を固定して、ドミを弾いている5指と3指をその形のまま僅かに左側にずらすというように指の動かし方を解説した。Aが指の移動を確認しながら練習する間、B学生はA学生の練習に合わせて各ポジションの音程を声に出して歌いながら手の形を復習した。その後、I→V→I、I→IV→I、I→IV→I→V→Iのように、一度基準のIに戻る和音の進行によるポジション課題を互いに出し合いながら繰り返し演習した。これによってA学生は確実にポジションを覚え、B学生はポジションと響きを一致させることができた。

(2) 弾き歌いにおける学び合いの姿

弾き歌い《春がきた》に取り組んでから約1か月後、初学者と経験者を組み合わせて2名ずつで聴き合い、意見を交換する時間を作る。初学者に対しては、ピアノパートが十分に弾けるようになったら歌をつけてみるように、まだピアノパートに自信がない場合は4小節だけに絞って弾き歌いしておくようにと指示してある。初学者、経験者ともに、ピアノパートの指導はしているが、弾き歌いとしての指導はこの時点ではまだ行っていない。弾き歌いをするにあたっての注意事項を前もって伝えてあるだけである。

A学生は練習を積み重ね、前奏から終わりまで、間違えずにしっかりとしたタッチでピアノパートを演奏できるようになっている。しかし、弾き歌いをする時、ピアノの一音一音に合わせて一文字ずつの発音となり、切れ切れになってしまう（はアるがきイたア）。そこで筆者の伴奏に合わせて、立った姿勢で「独唱の曲を歌う時のように」と助言すると、見違えるほど響

きの良い声で歌った。次に再びピアノの椅子に座り歌ってみる。立って歌うことだけに専念した時の感覚や、発声の違いを自覚した後で、4小節間だけもう一度弾き歌いする。弾きながら歌うのだが、「歌に専念するつもりで、ピアノは間違えることを恐れずに、弾けなくてもいいと思って」と助言すると、ピアノを弾きながら歌うことができた。これが練習のヒントとなる。また、ペアになった学生には、歌とピアノのバランスに関する助言をしながらバランスが良くなるまで演習した。A学生は他者の演奏を聴くことにより歌とピアノのバランスを変えると、聞こえ方が変わることに気づいた。

B学生はまだ十分に弾くことができないため、余裕をもって弾くことのできる2小節間だけ弾きながら歌うことにした。しかし、歌おうとすると手が止まり進むことができない。そこでB学生には、弾き歌いの演奏を具体的にイメージさせるために、ペアの学生の様子をしばらく観察させることにした。良いバランスで《夕やけこやけ》を美しく弾き歌いしたペア学生の演奏を聴くことにより、はっきりとしたイメージをもったB学生は、その後の取り組みで2小節の弾き歌いをすることができるようになった。

弾き歌いでは、ピアノを弾く身体の使い方と、歌うための身体の使い方を同時に行わなければならない。歌とピアノのバランスを聴くことも必要である。一人ひとりが体験しながらその感覚をつかんでいくことが大切なのだが、歌とピアノのバランスについては、他者の演奏を聴き、バランスが良くなっていく過程を観察することが有効だとわかった。

4. 実技発表・集団指導

実技発表は、①ピアノ独奏・独唱（前半）②独唱（後半）弾き歌いを2週連続で行い、2週間後合唱発表という日程を組んでいる。合唱合奏室を使用して、発表は全員で聴き合う。伴奏は全て学生間で行い、弾き歌いの発表が終わるまで原則として期間中の個人レッスンは行わない。発表が終わると教員は直ちに別室に移動して協議し、再試験の必要な学生を決定する。講評をした後に再試験者をその場で告知する。

(1) 実技発表における学び合いの姿

①独奏・独唱

この実技発表の期間に学生は目に見えて変化をしていく。発表の緊張を体験し、他者の演奏を聴き講評を聞く。表情豊かな演奏に感動し、緊張が伝わる演奏にはまるで自分のことのように感じる。初学者の誠実な演奏に心惹かれ短期間の成長に目を見張り拍手を送る。そんな時間を重ねて、発表の場の空気は次第に変化し集中と程よい緊張感に包まれるようになっていった。今期はピアノ独奏、独唱の再試験該当者はいなかった。

②弾き歌い

弾き歌いの再試験該当者は5名、今期は全員ピアノ初学者だった。そのうち筆者が担当したB学生とC学生が再試験該当者であった。再試験該当者に対しては、まずピアノ担当教員2名で5名合同での補講を行った。はじめに弾き歌い発表で感じたことや気づきなどの意見交換をしたが、ここでは「緊張に対する対策」や「歌とピアノのバランス」がテーマとなった。発表直後ということもあり、互いに共感し、刺激し合いながら再試に向けての決意を新たにす

となった。歌い手、伴奏者と役割を交代しながら全員で演習した後、モデル学生を2名決めて、その場での弾き歌いに対して助言しながら、問題点が解決していく様子を観察した。その後それぞれ分かれて、担当学生の個人指導を行った。

(2) 再試に向けての学び合いの姿

弾き歌い再試験に向けて練習する期間は、合唱練習の仕上げの時期と重なる。この頃になると時間外の練習も回数を増やして行われ、練習室からは頻繁に合唱練習の歌声が響くようになる。再試予定者は練習の合間に班のメンバーに弾き歌いを聴いてもらうこともあり、メンバー一丸となつての再試験対策も講じられる。このようにしてこの授業のクライマックス、再試験と合唱発表日を迎える。

再試験を時間のはじめに行う。1人目が前に出た瞬間から聴き手は集中し、かたずをのんで見守る。これまでの実技発表とは違う緊張感である。再試験を受けた5名全てが練習の成果を発揮することができた。B学生の弾き歌いには、めざましい進歩が見られた。授業が始まった頃、音程を正確に取ることが困難で不安定な歌い方をしていたが、今期を過ごした今、正確な音程で十分に歌いながら、落ち着いて弾き歌いをするようになった。

2週間の準備期間中に、班のメンバーに支えられ励まされながら努力して、ほとんどの学生が自身に「納得できる」演奏に到達することができた。

IV おわりに

「初等音楽科内容構成研究」の実際の授業を通して、ピアノと弾き歌いの学習の過程で、初学者の学生同士の学び合いによって、大きく以下の三点の効果を確認することができた。

- ①他者との共感や励まし合いにより、不安が軽減され積極的な取り組みに繋がる。
- ②同じ時間の中で他者が課題を解決していく姿を観ることにより、視覚的・聴覚的イメージができ、具体的な目標をもって自ら取り組むことができるようになる。
- ③グループの目標設定のレベルが高くなると、メンバーで意見交換や助言し合う場面を多くもつようになり、初学者が気づきや学びを得る機会が増えて練習効果が上がる。

個人指導と学び合いの相乗効果により、ほとんどの学生が自身に「納得できる」演奏に到達できた。

もっとも演奏力としてみると十分とはいえず、個々の演奏レベルをいかにして上げるかが今後の課題である。これまで、個人指導における学び合いの場は、ピアノレッスン順で前後の2名を組み合わせしてきた。この組み合わせ方を見直すことにより、指導の効果を上げることができないのではないかと考えている。今後は、学生の技能や性格などを考慮したより学習効果が上がる組合せを模索するとともに、学生同士の意見交換が深まらない場合に、指導者がどのような助言をしたらよいのかさらに考えていきたい。

注

- 1) 協同出版「64都道府県市 教員採用データ/教職採用試験データベース」を参照した。

<http://www.kyodo-s.jp/saiyo-data/> (2017年3月9日にアクセス)

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(審議のまとめ), 2012年5月15日,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/sonota/1321079.htm
(2017年3月2日にアクセス)
- 2) 日本教育大学協会全国音楽部門大学部会『日本教育大学協会全国音楽部門大学部会会報』第37号, 2012年10月
- 3) 佐々木直樹「『初等音楽科内容構成研究』授業実践報告—演奏表現の理解と技術習得—」『島根大学教育学部紀要第45巻別冊』, 2012年2月, pp.55-57.
- 4) 鈴木由美子「初等教育課程教員及び保育士養成校におけるピアノ実技指導に関する一考察」『千葉敬愛短期大学紀要』第37号, 2015年3月, pp.73-83.
- 5) 荻田泉「幼児・初等教育の指導者養成におけるピアノ指導法の研究—初心者の学習意欲を高める教授法について—」『四天王寺大学紀要』第53号, 2011年3月, pp.215-232.
- 6) 大学音楽教育研究グループ(編)『2訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』, 2015年, 教育芸術社
- 7) 大学音楽教育研究グループ(編)『改訂 大学・教職課程のためのバイエルと教材研究Cより始める指導の新体系』, 1979年(初版), 教育芸術社